

ジヨルジェ・アマード 『丁字と肉桂のガブリエラ』(五)

第一部第二章、原文二二二頁から一四五頁までの翻訳

尾 河 直 哉

Tradução japonesa de *Gabriela, cravo e canela* de Jorge Amado (5)

NAOYA OGAWA

キーワード

二〇世紀ブラジル文学 (literatura brasileira do século XX)、ブラジル北東部 (Nordeste)、カカオ地域 (região do cacau)、バイーア州 (Bahia)、イリエウス (Ilheus)、ブラジル民衆文化 (cultura popular brasileira)

(承前)

眠りについたガブリエラ

ナシブはガブリエラを聖セバスティアン坂の自宅まで連れてきた。鍵を鍵穴に入れるが早いのか、興奮したドナ・アルミンダが隣の窓から顔をだした。

「いったいぜんたいどうしたってのよ、ナシブさん。あんなにお上

品で、あんなにお澄まししてたあの人が。教会だって午後になると欠かさず通ってたんだよ。だからいつも言ってるのよ、あたし…」ガブリエラに視線を投げると、話を中断する。

「家政婦を雇ったんだ。洗濯や料理をしてもらうつもりで」

ドナ・アルミンダは、身長や体重でも測るように、干魃移民を頭の前から足の先までなめ回すように見ると、親切な申し出をする。

「お嬢ちゃん、なにか困ったことがあったらなんでもあたしに言いな。お隣さん同士助け合わなくっちゃ、ね？ 今晚はちょっと出てるけど。デオドーロさんとところで交霊会がある日だから。死んだ夫が話しに来てくれるんだよ…ドナ・シニャジーニャだって姿を見せないともかぎらないし…」と言って視線をガブリエラからナシブに移す。「若いじゃないか、ええ？ フィロメーナみたいな婆さんはもうやだっつかい…」と含み笑いをする。

「見つかったのがたまたまこの娘だったただけで…」

「あたしだっけとそう言ってきたんだから、別に驚きやしな

いよ。このあいだもね、例の歯医者道を道で見かけたんだよ。それが奇遇でさ、交霊会のある日だね。ちょうど一週間前だ。歯医者を見てたらさ、死んだ夫の声が聞こえてくるのさ。『見てみる、あんなに粹がってるが、あいつは死んだも同然だ』って。最初は夫があざけているんだと思ってたけど、今日になって分かったわ。あの人、教えてくれたんだよ。予告してくれんだね、あたしに」

ドナ・アルミンダはガブリエラの方に向く。ナシブはもう家に入っていた。

「なにか困ったことがあつたらなんでもあたしに言いな。明日一緒に話しようね。いつでも力になるよ。ナシブさんだつてあたしにとつちや親戚みたいなもんさ。息子のシコの雇い主だから……」

ナシブは庭に面した部屋をガブリエラに見せた。フィロメーナが以前使っていた部屋だ。やることを説明する。部屋の片づけ。汚れ物の洗濯。ナシブのための料理。ボールに出す辛いつまみと甘いものについては触れなかった。まずは女がどんな料理を作るのか見たかったからだ。シコ・モレーザが市で買ってきて置いていった食器棚も見せた。

「分らないことはなんでもドナ・アルミンダに訊いてくれ」

ナシブは急いでいた。日は暮れている。まもなくするとボールもまた混み出すだろう。夕食だつて食べておかなければならない。ガブリエラは部屋のなかで目を大きく見開き、夜の海に見入っていた。海を見るのは初めてなのだ。出がけにナシブが言う。

「それと、風呂に入りなさい。そのままじゃ困るから」

ホテル・コエーリヨでナシブはムンデイーニヨ・ファルカン、隊長、博士の三人に出くわした。夕食中だった。ナシブは自然とそのテーブルにつき、料理女の話をする。三人は黙って話を聞いていた。重要な話の腰を折ってしまったことにナシブは気が付いた。四人はひとしきり午後の事件を話題にしたが、ナシブが食事を食べ始めると、すでに食事の終わっていた三人は席を立った。残されたナ

シブはしばらくひとり考え込む。あの三人はなにか企んでいるらしい。だが、いったい何を。

その晩、ボールは息つくひまもないほど忙しかった。テーブルは満席で、さながらひとつの輪のように活気づき、だれもが事件についてひとこと言いたがる。十時ごろになると隊長と博士が現れた。『日刊イリエウス』編集長クローヴィス・コスタを連れている。ムンデイーニヨ・ファルカンの家からやってきたのだった。輸出業者はアナベラのデビューを見に夜中の十二時ごろバタ克蘭にやってくるという。クローヴィスと博士はひそひそ話をしていた。ナシブは聞き耳を立てる。

別のテーブルではトニコ・バストスがアマンシオ・レアールの家で開かれた夕食会について話していた。まるで宴会のようだった。ジェズイーノ・メンドンサの友人たちが何人も呼ばれ、そこには大佐の弁護を依頼されたマウリーシオ・カイレス博士もいた。山のような馳走とポルトガルワイン。食べ物も飲み物もふんだんにある。ニョーIIガールは気ががい沙汰だと思った。妻の死体がまだ温かいというのに、こんなことが許されるのだろうか。アリ・サントスは、親戚の家で行われたシニャジーニャの通夜のような話を語った。侘びしく惨めな通夜で、参列者は六人くらいしかいなかった。オズムンドの通夜については語るまでもない。数時間前から歯医者遺体につき添っているのは家政婦だけだった。アリ・サントスはそこを訪れたのだった。なんのかんの言っても死んだ男とは知り合いで、二人はルイ・バルボーザ文学会で親しくしていたからである。

「おれもあとでちよつと寄つてみるか……」と隊長が言う。「いいやつだったし、才能もあった。詩なんか抜群に良かったんだが……」

「おれも行くわ」とニョーIIガールが連帯を表明する。

十一時ごろ、ボールの客も少なくなってきたころあいに、ナシブも他のいく人かとともに好奇心から二人について行った。血の気の

退いたオズムンドの顔は死んだまま微笑んでいる。ナシブは胸を突かれた。十字に組んだ手が蒼白い。

「銃弾が胸に当たったんだよ。心臓に」

最後にキャバレーへ流れた。踊り子を鑑賞して、今しがた見た死体の姿を脳裏から追い出そうというのだ。ナシブはトニコ・バストスと同じテーブルについた。周囲ではたくさんの人が踊っている。廊下を隔てた別室では賭博。すでにかなり酔っ払ったエゼキエル・プラード博士が二人の席にやってきた。ナシブの胸に指を突き立てて言う。

「あんた、あのやぶにらみにずいぶんご執心だそうじゃないか」と言つて、行商人と踊っているリゾレータを指さした。

「ご執心？昨日一緒にねえしたつてそれだけのことよ」

「人さまの恋路に茶々入れるのは趣味じゃないんでね。それでいちおう訊いてみたつてわけよ。と、くりやあ…あの娘、ずいぶん別嬪じゃないか、ええ？」

「で、エゼキエル先生よ、マルタはいいのかい」

「あいつ、くだらんことしやがつて。さんざんぶん殴つてやつたぜ。今日はあいつんとこにや行かない」

エゼキエル・プラードはトニコのグラスを取ると、一気に飲み干した。弁護士と、数年前から弁護士が困っているブロンド女との喧嘩はつねに町の話題で、話題のタネはきちんと三日おきに送り届けられていた。弁護士が酔つて殴れば殴るほど、女は夢中になつて弁護士にしがみつく。弁護士を捜してキャバレーには行くわ、娼家には行くわ。別の女のベッドから弁護士を引きずり出したこともある。弁護士の家族はバイアに住んでいて、妻とは別居の身だ。

弁護士はふらふら立ち上がると踊り子たちのまんなかに入つてゆく。リゾレータと行商人の間に割つて入つた。トニコ・バストスが言う。

「喧嘩がおつぱじまるぞ」

しかし、行商人はエゼキエル博士の噂をよく知つていた。弁護士に女を譲ると、別の女を目で物色し始める。リゾレータは嫌がつていたが、エゼキエルは女の手首を掴むと、抱き込んだ。

「ご馳走したな…」とトニコ・バストスが笑う。

「ありがたいこつたよ。今日はおれ食指が動かないんだ。くたくたでね。もうひとり踊るの見たら退散するわ。さんざんな一日だったから」

「で、料理女は？」

「やつとひとり見つかつたよ。セルタン移民だけど」

「若いのか？」

「よくわかんないけど…たぶん若いんだろう。あんなに汚れてちゃあ、分かりようがないつて。トニコさん、セルタン移民つてのは年齢がないようなもんだよ。若い娘だつて老婆に見えるんだから」

「かわいいか？」

「どうやつて知れつづうの？ぼろ切れまどつて、ごみみたいに汚くて、髪の毛なんかほりりでガビガビに固まつて。もしかしたら魔女かもな。うちはトニコさんところは違つてさ、社交界のご令嬢と見まごうばかりの家政婦は雇えないんだよ」

「うちもオルガが許してくれば、そうなつていたかもな。でも、家に来た家政婦は可哀想にヒトの顔してるだけで外に叩き出されるんだ」

「ドナ・オルガはくそ真面目だからなあ。まあそれも仕方ないか。あんたの手綱をぎゅうぎゅう締めとかなきやならんから」

トニコ・バストスは身振りうわべだけ謙遜を示した。

「あんた、そんな大げさな。聞いている人がなんて思うか…」

ムンデイーニョ・ファルカンがリベイリーニョ大佐とやつてきた。隊長カピタンと同じテーブルに座る。

「で、博士は？」

「キャバレーにはぜったい来ないんだよ。無理矢理連れて来ようとしても」

ニヨー||ガールがナシブに近づく。

「あのなんとかって女、エゼキエルに任せていいのか?」

「今日はおれ、ひとりで寝たいんだ」

「じゃあ、あおれはゼルダの家に行くぜ。なんでもペルナンブーコ女がひとり入ったらしい。グラマーだつて話だ」と言つてニヨー||ガールは舌打ちをする。「いずれここにも姿を見せるかもしれない…」

「がっしりしたタイプのか?」

「そう。ケツのかい」

「そいつあ今トリアノンにいる。毎晩、あつちに行つてるよ…」とトニコが説明する。「メルク大佐が旦那だ。大佐がバイアアから連れてきたんだと。ずいぶんお熱らしいぜ…」

「大佐は今日農場に行つたよ。船に乗るところ見たから」とナシブが情報を提供する。「『奴隷市場』で労働者と契約してた」

「おれはトリアノンに行く」

「踊り子が踊る前に?」

「踊りが終わつたらすぐ」

バタ克蘭とトリアノンはイリエウスの二大キャバレーで、輸出業者、大農場主、商人、出張中の大商社マンが通つていた。しかし街角には他にも港湾労働者や農場からやつてきた人々、安娼婦が集まるキャバレーがある。賭博はどこでも大手を振つてでき、収益は確実に見込めるのだった。

小オーケストラがダンスのテンポを取っている。トニコは女を見つげに席を立つた。ニヨー||ガールがしきりに時計に目を遣る。すでに踊り子が出る時間になっていた。いらいらしている。メルク大佐の尻デカ女を見にトリアノンに行きたくてしかたがないのだ。

午前一時も近いころだった。オーケストラの演奏が止むと電気が

消えた。小さな青いライトだけしか点いていない。賭博室からたくさん客が出てきて、テーブルのあいだに広がる。出入り口のそばに立つ者もいた。アナベラが奥から現れた。羽根をあしらった巨大な扇子を手にはしている。それを使って、身体の一部を隠したり、見せたりする。

タキシードを着た王子がピアノを叩く。アナベラはホールの中央で踊り、テーブルに微笑みかける。大成功だった。リベリーニョ大佐はアンコールを叫び、スタンディングオベーションを送る。明かりが点くと、肉袴を着たアナベラが拍手に感謝していた。

「うんざりだぜ…生肌見てると思つてたのによ、肌色の布じゃねえか」とニヨー||ガールがくさす。

アナベラは拍手に包まれていったん下がると、数分後に再び登場して二つ目の演目を演じた。それはいつそうセンセーショナルな演目だった。さまざまな色のベールをまとい出てくると、それを一枚一枚脱ぎ捨ててゆくのである。ムンディーニョの言つたとおりだった。最後のベールが脱ぎ落とされて再び照明がつくまでの一瞬、スレンダーで見事な身体を見ることが出来る。身につけているのはビキニと下と、小ぶりの胸を覆うちっぽけな赤い布だけ。ほとんど裸体であった。ホールはどよめき、アンコールの声があちこちから飛んでくる。アナベラはテーブルのあいだを走り回つた。リベリーニョ大佐がみんなにシャンペンを振る舞う。

「今度はさすがに見たかいたがあつた…」とニヨー||ガールまでが狂喜していた。

アナベラと王子はムンディーニョ・ファルカンのテーブルに向かった。「ここはぜんぶおれのおごりだ」とリベリーニョ大佐が言う。オーケストラは演奏を再開し、エゼキエル博士はリゾレータをつかまえると椅子に倒れ込んだ。ナシブはぼちぼち帰ろうと思ひ、トニコ・バストスはアナベラをじつと見つめたままムンディーニョのテーブルに移動しようとする。ニヨー||ガールの姿はもうな

かった。踊り子は微笑み、シャンパンのグラスを高々と上げる。

「みなさんの健康と、イリエウスの発展を願って！」

拍手が起こる。近くのテーブルからは嫉妬の眼差しが注がれていた。多くの客は賭をしに別室に移ってゆく。ナシブは店の階段を降りていった。

ナシブは静まりかえった通りを歩いた。マウリーシオ・カイレス博士の家の窓からは光が漏れている。ジェズイーノ事件の研究を始めているんだらう。弁護のための資料を準備しているに違いない。パールで憤慨していた弁護士の言葉を思い出してナシブはそう考えた。ところが、窓のすき間から漏れてきたのは女の笑い声だった。それが通りに消えてゆく。噂によれば、この男やめは丘の黒人女を夜な夜な家に連れ込んでいるという。噂を知っていたナシブにも、このとき弁護士が、おそらく純粋に職業上の関心からかなのだらう、驚くウニヤン丘のムラータを説き伏せ、木綿の黒いストッキングを穿いたまま裸でベッドに横たわってもらっていたことまでは想像できなかった。

「世の中には変わった趣味もあるもんだわ……」ムラータは虫に喰われて前歯の欠けた口を開けて笑ったのだった。

ナシブは大変だったその日一日の疲れを感じていた。ムンデイーニヨ・ファルカンがああして行ったり来たりし、隊長と博士と密談したり、クローヴィスと密かに会ったりしていた理由がやつと分かった。港口の件が絡んでいる。ナシブは会話の断片をキャッチしていた。ムンデイーニヨたちの話を総合すると、まもなく技師と浚渫船とタグボートがやってくる。好むと好まざることにかかわらず、外国の大型船が港に入ってきてカカオを積むことになるだらう。直の輸出が始まる。だが、好まない人がいるとすればそれはだれだ？ ひよつとしてバストス一家、ラミーロ大佐と闘争でも始めるんだらうか？隊長は以前から地方政治で支配権を握りたいと言っていた。しかし大農場主ではないし、湯水のように使える金があるわけじゃ

ない。そこでムンデイーニヨ・ファルカンの友情が生きてくるって寸法か。いやはや大ごとになりそうな雲行きだ。ラミーロはあの年齢だが、手をこまねいて見過ごしたり、戦わずして白旗を振ったりするような男じゃない。ナシブとしては騒動に巻き込まれたくなかった。両陣営とも友人だ。ムンデイーニヨも大佐も、隊長もラミーロ・バストスも。パールの主人が政治に顔を突っ込むわけにはいかない。そんなことしたって良いことなんかひとつもない。亭主持ちの女にちよっかい出すよりずっと危険だ。

シニャジーニャとオズムンドは、ついにタグボートも港口を浚渫する船も目にするのがなくなってしまう。ムンデイーニヨが語る発展の日々を見ることも。人生とはそんなものだ。歎びと悲しみで織り上げられている。

教会に沿って曲がり、ゆつくりと坂を上り始める。トニコ・バストスがシニャジーニャと寝たつてのはほんとうだらうか？あるいは粹がって吹いた法螺にすぎないのか？トニコはかなり厚かましい法螺吹きだつてニョーガールは断言していたし。そもそもあいつは亭主持ちにちよっかい出さないんだつて。ところが、妾となるとおかまいなしだ。女の旦那のことなんかこれっぽちも気にかけるおかない。運がいいというか。それにあの洗練された風采だ。長い銀髪。耳元で優しくささやくような声。ナシブはできることならトニコのようになってみたかった。女から欲情した目で見られてみたい。激しい嫉妬を浴びてみたい。ニコデモス大佐の女リディアがトニコを愛したときのよう、狂ったように愛されてみたかった。リディアはしよっちゅう手紙を送りつけ、会いたい一心で百里の道も遠しとせずにやってきてはトニコに熱い思いをささやこうとしたが、そんな過剰な愛にうんざりしていたトニコはリディアに見向きもしなかった。リディアは、その眼差しと言葉でトニコの身を危うくしかねなかつたのである。トニコはどの女もお手軽に扱っていた。グローリアだけは別だったが、その理由はだれもが知るところ

である。ただ、亭主持ちの女に手を出したという噂だけは聞こえてこなかった。

坂道を上ったため息を切らしながら鍵を鍵穴に差し込んだ。居間には電気がついていて、泥棒だろうか？それとも新しい家政婦が電気を消し忘れたのか？

そつと部屋に入ると、家政婦はソファで眠っていた。長い髪が肩に掛かっている。洗って櫛を入れると、それはカールした豊かな長い黒髪だった。服は着古したが、清潔だ。おそらく衣類の包みにあったものだろう。服地の裂け目からは肉桂色の太股がのぞいている。呼吸につれて胸がゆっくり上下していた。寝顔が微笑んでいる。

「ああ！」ナシブは足を止めた。我が目が信じられなかった。

ただただ息をのんで娘を見つめる。道の埃の下にこんなにきれいな娘が隠れていたなんて。下に垂れたふつくとした腕。眠りながら微笑む小麦色の顔。目の前のソファで眠る娘の姿はさながら一幅の絵のようだった。この娘はいつたいいくつだろう？身体はもう女だが、目鼻立ちはまだ少女のようだ。

「ああ、なんとという！」ほとんど宗教的な気持ちに迫られ、ナシブはつぶやいた。

娘は声を聞きつけ、びっくりして目を覚ました。が、すぐに微笑む。娘と一緒に居間まで微笑んだように思えた。娘は立ち上がると着ていた服のしわを直す。その姿は、月の光に包まれたように、素朴だが明るく微笑んでいた。

「どうして布団で寝なかつたんだい？」ナシブがやっと口でできたのはこれだけだった。

「旦那さんがなにも言わなかつたから」

「旦那さんで？」

「ご主人さまのことです…洗濯物して、部屋の片づけもやつとききました。待ってたら眠くなっちゃって」北東部女性の歌うような声

だ。

娘からは丁字の香りが漂ってきた。きつと髪の毛からだろう。首筋からかもしれない。

「ほんとに料理できるのかい？」

娘の髪に光と影が映っている。目を伏せて素足で床を撫で、いまにも踊り出しそうだ。

「はい、旦那さま。お金持ちの家で働いて、料理を教わりました。料理するのってほんとに好きなんです」と言って笑い、娘と一緒になにもかもが笑う。アラブ人ナシブはソファにどつかと腰をおろした。

「ほんとうに料理できるんなら給料ははずむよ。月に五万レイスだ。こらじゃせいぜい二・三万レイスだけだ。もし仕事できついなと思つたら、助手に女の子つけることもできるから。フィロメーナ婆さんはやだつて、ぜつたい受け付けなかつたけど。助手をつけるくらいなら死ぬつて」

「あたしも要りません」

「で、給料の方は？これでどうだい？」

「旦那さんが払いたい金額なら、あたしはそれでいいです…」
「明日料理を作ってみよう。昼食の時間になったら料理を取りにちびくろをよこすから…ボールで食べてみるよ。今日は…」

唇に笑みを浮かべて、娘はじつと待っている。月の光が一筋髪に落ち、そこからはあの丁字の香り。

「…今日はもう遅いからお休み」

娘は部屋から出てゆこうとする。ナシブはその足を、歩くときの身体の揺れを、肉桂色の太股の一部をじつと見つめた。娘は振り返ると言った。

「じゃ、旦那さん、おやすみなさい…」

娘は廊下の暗がり消えていった。娘がもぐもぐ言いながら「すてきな旦那さん…」と付け加えたように聞こえた。立って声をか

けようかと一瞬迷う。いや、これは今日の午後、市で耳にした言葉だ。声をかければ怖がるだろう。ずいぶん純真そうな娘だから。ひよつとすると処女かも知れない：なにごとにも時間が大切だ。ナシブは上着を脱ぐとソファに掛け、ワイシャツを脱ぎ捨てた。居間には芳香が残っている。丁字の香りだ。明日はあの娘にキャラコの服を買ってやる。部屋履きも。プレゼントだ、給料とは別の。

ベットに腰掛けて靴を脱ぐ。色々あった一日だった。たくさんのが次から次へ折り重なって。ナシブはパジャマに手を通す。今度の家政婦、あの娘の肌はほんとの小麦色だったなあ。それにあの目。ああ、どうしたらいいんだ：ナシブは日焼けした肌が好きだったのだ。横になると電気を消す。すぐに眠気に襲われた。眠りは安らかではなかった。夢にシニヤジーニヤが現れた。裸で黒いストッキングを穿き、港口を入ろうとする外国船のデッキに横たわって死んでいる。オズムンドがバスで逃げ、ジェズイーノがトニコを撃った。ムンデーニョ・ファルカンが今度は生きたドナ・シニヤジーニヤと現れ、ナシブに微笑みかける。シニヤジーニヤは腕を広げてナシブに近づいてくるが、その顔は新しい家政婦の小麦色の顔だった。しかしナシブの手が届く前に、女は踊りながらキャバレーに飛び込んでゆくのだった。

葬儀と宴会

あまり模範的とはいえないお話

ドナ・アルミンダの声でナシブが目覚めたとき、太陽はすでに高く上っていた。

「お嬢ちゃん、お葬式見に行きましょうよ。見といて損ないわよ」

「いやそれが、旦那さんがまだ起きてないもんで」

ナシブはベッドから跳ね起きた。葬儀を見逃す手はない。浴室か

ら出てきたときにはすでに着替えを済ませていた。ガブリエラがちょうどコーヒーポットをテーブルに置いたところだった。ポットのミルクコーヒーから湯気が立っている。白いテーブルクロスの上にはココナッツミルク入りのコーンミール、バナナのフリット、ヤマイモ、キャッサバが載っていた。ガブリエラは台所の扉のところ立って、「旦那さん、好きなものをいってくれなきゃ」と言いたげな顔をしている。

ナシブはコーンミールを一口飲み込んだ。目がとろんとする。食い道楽としてはこのままテーブルを離れたくないが、好奇心がしきりに急ぎ立てる。もう葬儀の時刻だ。コーンミールは神業。バナナのフリットは美味の極致だった。テーブルから無理矢理身体を引き剥がす。ガブリエラはリボンで髪を結んでいた。あの小麦色の首筋にかじりつけたらさぞかし素敵だろう。ナシブは家を出ると半ば走ってボールに向かった。道中、ガブリエラの歌が伴走してくれる。

そこにいつちゃだめよ、あなた、

そこには坂があるから、

滑って、転んで、

バラの枝を折っちゃうわ。

浜辺から始まったオズムンドの葬列は広場の並木道にやってきたところだった。

「棺の取っ手を持つ人数さえまともにいない」と言う者があつた。

まさしくそのとおりだった。これほど随行者の人数が少ない葬列も想像しづらい。オズムンドがイリエウスの通りを最後に練り歩く、その付き添いをする勇気があるのは最も親しい友人数名だけだった。歯科医を墓地まで運ぶという行為は、ジェズイーノと社

会に対する挑戦に等しかったのである。アリ・サントス、隊長、^{カヒタシ}ニヨーロ、『日刊イリエウス』編集委員、その他数名が交替で棺の取っ手を握る。

故人はイリエウスに親類縁者がいなかった。しかし、町に着いてから数ヶ月のあいだに多くの人間関係を築いていた。人なつこく愛想の良い性格で、発展クラブのダンスパーティー、ルイ・バルボーザ文学会、ホーム・ダンス・パーティー、ボールやキャバレーに足繁く通っていたからである。それなのに、今墓地へと向かっている男は社会の哀れな落伍者のようだった。棺には花冠もなければ、葬列に涙する者もない。ある商人が取引のあるオズムンドの父親から電報を受け取っていた。電報には息子の葬儀に必要な一切合切をよろしく頼む、次の船で行く、とあった。商人は棺と墓穴の手配をし、万が一友人がひとりも現れなかったことを考えて棺桶を運ぶ人手を港で雇った。棺の上に載せる花冠や添える花にまで金を出す必要はなからうと考えたのである。

ナシブはオズムンドと深いつきあいがあったわけではない。歯科医がナシブのボールに立ち寄ったのはほんの一二度。先方はカフエ・シツクの常連だった。ほとんどいつもアリ・サントスやジョズエー先生のような人たちと一杯ひっかけはソネットを披露しあい、散文の一部を朗読しあい、文学を論じていた。ナシブもいどこかその席に居合わせたことがある。時評の一部や、女性を謳った詩句を耳にすることができた。だれもが思うように、ナシブも歯科医をいい奴だと思った。有能な歯科医という評判も高く、客が増え始めていた。ところが今日にしているのはこのみじめな葬列である。人もいなければ花もない。棺など丸裸。ナシブは悲しくなつた。なにがあつたにせよ、あまりに不公正ではないか。わが町ながら恥ずかしい。三文詩人の才能を称賛していた人たちは今どこにいるのか？奥歯の抜きかたが巧いとあれほど歯医者を褒めていた客たちは今どこにいるのか？ルイ・バルボーザ文学会の同人たちは？発

展クラブの友人たちは？ボールの仲間たちは？みんなジェズイーノ大佐に知られるのが怖いのだ。老嬢たちの口端に上るのが怖いのだ。町からオズムンドの仲間だと思われるのが怖いのだ。

ちびくろが、その晩映画館で催されるデビュー公演のチラシを葬列の見物人に配っていた。『ヨーロッパの平土間席に歓呼で迎えられた今世紀最高の奇術師にして行者にして催眠術師たるかの高名なインド人サンドラ王子と、炯眼霊媒師にして恐るべきテレパシーの使い手たるその助手アナベラ』のチラシである。風に巻き上げられ、チラシが一枚葬列の上を舞った。オズムンドはついにアナベラを知ることがなかった。アナベラの礼讃者のひとりになることも、その肉体争奪戦に加わることもなかった。葬列が教会前の広場の近くを通過したとき、ナシブは随行者に加わった。墓地まで行くつもりはない。ボールをほっておくことはできないし、夜にはバス会社の晩餐会も入っている。だが、街区のひとつやふたつぶん葬列に随行するのはおれとして最低限の義務だろう。

葬列はドス・パラレレピーベドス通りに入った。こんな通りに入るなんて、なぜだ？ストリートな近道ならアダミ大佐通りなのに、通夜でシニャジーニャの遺体が置かれている家の前をなぜわざわざ？隊長の^{カヒタシ}発案に違いない。グローリアが窓から葬列を眺めていた。ネグリジエの上にガウンを引っかけている。光沢のあるキャンブリック布地からこぼれ出そうなその乳房の下を棺は通過した。

エノクの学校の門には子供たちが好奇心むき出し顔で折り重なるように群がっていた。その門前でニヨーロと交替したジョズエー先生が棺の取っ手を持つ。シニャジーニャの親戚が住む家の前では、黒装束の人たちが数人立っていた。オズムンドの棺は貧弱な随行者とともにその前をゆっくり進み、随行人は帽子を取って行く。と、喪に服した家の窓から誰かが叫んだ。

「他に通る道はなかったのかよ？あの可哀な娘を不幸にしただけじゃ満足できないってのか？」

マトリズ広場でナシブは帰路についた。シニヤジーニヤの通夜の前でしばらく足を止める。棺はまだ閉じられていなかった。部屋にはロウソクと花、そして花冠が置かれている。女たちが泣いていた。一方オズムンドのために泣く者はいない。

「もうしばらくお待ちください。もうおひと方の葬儀に時間が取られているので」と親戚のひとりが説明する。

家の主人であるシニヤジーニヤの従姉の夫は、不機嫌も露わに廊下を行ったり来たりしていた。今回の出来事は、男の人生に思いがけず降りかかってきたやつかい事だった。結局のところ、ジェズイーノの家から出棺はできない。いわんや歯科医の家からなど。慎みのない振る舞いになることは必定だ。男の妻はイリエウスの町に住むシニヤジーニヤの唯一の親戚で、それ以外の親戚はすべてオリヴェンサに住んでいた。おれが遺体を運び込んで通夜をしてやらなわけに行くだろうか？とところが男はよりによってジェズイーノ大佐の友人。大佐とは商取引まであった。

「やつかいな(こと)になった…」

てんやわんやの一昼夜だった。出費については言うまでもない。いったいだれが払ってくれるのか？

仏の顔を拝みにナシブは中に入った。女は目を閉じ、穏やかな顔だった。髪は真っ直ぐに撫でつけられている。ナシブの目は形の良い脚に釘付けになった。が、視線を外す。シニヤジーニヤの脚など眺めている場合ではない。博士の肅然たる姿が客間に現れた。しばらく死者の前に立つと厳かな声で言う。ナシブに向けた言葉だったが、みんな聞いていた。

「アーヴィラ家の血を引いておった。運命の血だ。オフエニージアの」と言うのを擧げてこうつけ加えた。「そして私の縁者でもあった」

門と窓に群がった野次馬が驚きの目で見守るなか、自宅の庭から摘んできた花束を抱えて家の中に入っていったのはマルヴィーナ

だった。まだ学校に通っている大農場主の独身娘が、浮気から死んだ亭主持ちの葬儀へいったいなにをしに来たのだろうか？まるで二人が親しい友人だったかのように。周囲はマルヴィーナに非難がましい目を向け、ひそひそとささやきあう。マルヴィーナは博士に微笑むと棺の下に花束を置き、口のなかでぶつぶつお祈りを唱え、入ってきたときと同じように昂然と頭を上げて出ていった。ナシブは驚いてポカンとした。

「あのメルクの娘はなんて大胆なんだ」

「ジヨズエーと恋仲なんですって」

ナシブはマルヴィーナを目で追った。その堂々とした態度が嬉しかった。自分自身でもなにか起こったのか分らないが、ナシブはその日不思議な気分を目を覚ました。オズムンドとシニヤジーニヤの痛みが感じられるのだ。歯科医の葬儀に人が集まらないことにも、殺された女の棺を置かれて愚痴る家の主人にも腹が立った。バジーリオ神父が到着した。握手して回りながら、雨が終わって空がからりと晴れ上がったことを話題にしている。

やつと葬儀が行われた。オズムンドの葬儀より規模は大きかったが、哀れな点で変わりはなかった。オリヴェンサからやってきた家族がすすり泣き、家の主人が安堵のため息をもらすなか、バジーリオ神父がもぐもぐと祈禱を捧げている。ナシブはバールに戻った。同じ時間に同じ家から出棺しておきながら、なぜ二人を一緒に埋めてやらないんだ？なぜ同じ墓穴に入れてやらない？これがしきたりってものなのか。偽善の塊め。情け知らずこの町じゃ、大手を振って闊歩するのは金ばかりだ。

「ナシブさあん、今度の家政婦さんてきれいなねえさんすねえ。べつぴんだあ」シコのうすらまぬけた声が聞こえてくる。

「寝ぼけたこと言いやがって！」ナシブは悲しくなった。

オズムンドの数少ない随行者が帰ったちようどそのとき、シニヤジーニヤの棺が入れ違いに墓地の門をくぐったことをナシブは後か

ら知った。ジェズイーノ・メンドンサ大佐が地方裁判所判事に会うため、弁護士のマウリーシオ・カイレス博士に付き添われて、判事の家を叩いたのもほぼそのころだった。その後、弁護士はボールに姿を見せたが、ミネラルウォーター以外の飲み物は断った。

「昨日の晩はアマンシオの家でいささか度を超してしまつて。最高級のポルトガルワインが出たもんだから……」

ナシブは弁護士の傍から離れた。前の晩のどんちゃんさわぎがどうのという話は聞きたくない。ドス・レイス姉妹の家へ行き、晩餐の準備が進んでいるか尋ねた。姉妹は事件のことにまだ興奮している。

「昨日の午前中にはあの人まだ教会にいたんだから。かわいそうに」と言つてキンキーナが十字を切る。

「ナシブさんがいらしたあのちよつと前なのよ、ミサであの人と一緒にだったのは」ぞつとしたとでも言うようにフロールジーニヤが付け加える。

「あんなことがあるからね……だからあたしたち結婚しないの」

姉妹はナシブを台所に案内した。ジュクンディーナと娘たちが忙しそうに立ち働いている。これなら晩餐会の心配はいらない。万事順調だ。

「ところで、料理女、見つけましたよ」

「すごいわね。で、どう？」

「コーンミールはよくできてます。そのほかの料理もまもなく分ると思います。昼食のときにでも」

「じゃあもう要らないのかしら。お皿の料理は」

「あと数日はやっていただけると……」

「でもキリスト生誕群像があるから……けつこうやること多いのよ」
ボールでは混雑のピークが過ぎた。ナシブはシコ・モレーザに昼食を取りに行かせた。

「おれの弁当箱を持ってきてくれ」

昼食の間になるとボールに客はいなくなつた。ナシブはいつたんレジを閉め、売り上げと出費を計算する。昼食が終わつて最初に現れたのは例によつてトニコ・バストスだった。食後酒に苦み入りのピンガを取る。その日の共通の話題は葬儀。次いで、アラブ人が帰つてからキャバレーでなにが起つたかトニコが語つた。リベリーニョ大佐が飲み過ぎて、家に担ぎ込まれるようなありさまだつたらしい。階段で三度嘔吐し、服がドロドロになつたという。

「あの踊り子にぞつこんなんだな……」

「で、ムンディーニョ・ファルカンは？」

「早めに帰つたよ。踊り子とはなにもないんだと。だれでも好きにしている、請け合うよだつてさ。とくりや、とうぜん……」

「言い寄つた……」

「ゲームを始めたつてとこかな」

「踊り子の反応は？」

「うん。まあ関心は持つてくれてる。ただ、リベリーニョを捕まえるまでは聖女づらだらうね。ピンときたよ」

「夫の方はどうなんだ？」

「完全に大佐側だ。リベリーニョのことならもうなんでも知つてるよ。おれの方にはその気もないみたいだけど。妻がリベリーニョに笑いかけたり、からだをびつたりくつつけて踊つたり、ゲロするときなんか支えてやつたりしてんのによ、あのくそつたれ、万々歳つて面してんだ。ところが、おれが近づこうものなら、ハイそこまですつて感じであいだに割り込んでくる。ありや立派に売女のヒモよ」

「あいつの商売邪魔することになるんじゃないか？」

「おれが？ そんなつもりはないよ。リベリーニョが週日分を払う。おれは休日分で満足だ……夫については心配するな。おれが土地の政治を仕切る親分の御曹司だつてこと、いまごろ耳にしてるはずよ。おれと仲良くやつてかなきゃだめだつて分かつた頃だろ」

シコ・モレーザが昼食を持って到着した。ナシブはカウンターを離れてテーブルに就いた。ナプキンを首に巻く。

「さて、料理女のお手並み拝見といくか？」

「新しく雇ったやつか？」興味津々でトニコが近づいてきた。

「あんなきれいな人みたことないですよ！」シコ・モレーザがしまりのない調子で言葉を垂れ流す。

「あなた、ありゃ魔女だつて言つてたじゃないか。嘘つきめ。友だちに隠し事しよつてのかい、ええ？」

ナシブは弁当箱のふたを上げて中身を取りだし、テーブルに並べる。

「おお！」立ち上る芳香に思わず叫び声が出た。鶏の煮込み。きつね色に焼けた肉。米。豆。焼きバナナのデザート。

トニコがシコ・モレーザに尋ねる。

「ほんとうにきれいなのかい？」

「そりゃもう……」

料理の上に覆い被さつて、

「料理はできないとか言つてなかつたつけ、ええ？ほんと嘘つきだよなあ、あなたは……ヨダレが垂れそうだけ」

ナシブがお裾分けをする。

「二人分はあるな。ひとつどうぞだい」

ビコ・フィーノはビールの栓を抜くとテーブルに置いた。

「あの娘なにしてた？」とナシブがシコに聞く。

「うちのババアと長話してました。霊の話です……つていうか、あちゃんが一方的にしゃべつてたんすけど。あの人は聞き役で、笑つてました。あの人が笑うとね、トニコさん、まわりの人はなんだかぼうーつとなつちゃうんすよ」

「おお！」一口食べるとナシブはまた声を上げた。「トニコさん、こりゃ天からの贈り物だ。今度ばかりは神様にお礼を言わなくちゃ。こんな据え膳ただけ」

「あつちの方の据え膳もだろ？ナシブさんよ」

ナシブは満腹になると、トニコが帰つたあと、いつものようにボールの裏手の木陰にデッキチェアを置いて横になった。一週間ほど前のバイアの新聞を手にとって葉巻に火をつける。幸運にすっかり満足して髭を撫でていると、午前中の葬儀の悲しみは薄れていった。あとでおじの店に行つて、手頃な値段の服とスリッパを買つてこよう。それからボールに欠かせない甘いものと辛いつまみの作り方をあの娘に教えて。埃にまみれて着古しの服を着たあの移民女に料理ができるとは……それにあの埃の塊にあんなに魅力的な女性が隠れていたとは……ナシブは神に抱かれたような安寧のなかで眠りについた。海からの微風がやさしく髭を撫でていた。

時計はまだ午後五時を告げていなかった。収税課はまだ仕事の真つ最中だというのに、ニョー・ガローが『日刊イリエウス』を一部手にして入つてきた。慌てている。ナシブがベルモットを一杯出し、さて新しい料理女のことでも話そうかと思つてみると、相手は鼻に掛かつた声を一段と高くして言った。

「おっぱじまつたぞ！」

「なにが？」

「これ、今日の新聞。出たばかりだ。見てみるよ……」

第一面に長い論説が掲載されている。しかも太字だ。タイトルは四段ぶち抜きで「恥ずべき港口の抛擲」とある。行政監督局とアルフレード・バストスを非難する記事だった。「カカオ地域の神聖なる利益を守るためにイリエウス市民から選ばれたる州政府代議士」アルフレード・バストスはその利益を忘却し、その「貧弱な演説で州政府の業績をひたすら誉め讃えるだけのヨイシヨ議員であり」、一方の行政長官はラミール大佐の一味で、「益体のない凡人にして、自らのポストと地方政治の大ポストに媚びへつらう腰巾着の典型」で、イリエウスの港口が抛擲されているのは、こうした権力にある政治家の責任である、と述べられている。記事は明らかに、前日の

イタ号の座礁を口実に書かれたものだった。「地方発展のアルファにしてオメガであり、富と文明かそれとも遅れと貧困かの雌雄を決する地域で最大の、また最も切迫したイリエウスの港口の問題、つまり、カカオが直接輸出ができるか否かという大問題」が、「甚だ特殊な状況において指揮命令権を濫用してきた」者たちにとっては存在しないのだ、と述べる。ここから激しい批判はさらに熱を帯び、だが、ここで思い出して欲しい、と明らかにムンデイーニョを暗示する文章で記事は閉じられる。だが、ここで思い出して欲しい、「高度な市民感覚を持ち、地方権力の犯罪的な無関心を前にして、ただひとり徒手空拳で問題に立ち向かい解決することのできる男たちがいることを。市民たちよ、この誉れ高く恐れを知らないイリエウスの市民たちよ、この豊かな伝統に培われしイリエウスの市民たちよ、どうか裁き、罰し、報いる術を知り賜わんことを」

「どうだ……えらく深刻だろう……」

「博士が書いたな」

「エゼキエールのような気もするが」

「博士だよ。間違いない。エゼキエール先生はきのうキャバレーで飲んでたから。こりゃひとめもあるな……」

「ひとめめだつて！呑気だなあ、あんたは。どえらいことになるぞ」

「今日このバールでおっぱじまらなきゃいいんだが」

「このバールって、なんで？」

「バス会社の晩餐会があるじゃないか。忘れたのか？みんな来ることになってるんだ。行政長官、ムンデイーニョ、アマンシオ大佐、トニコ、博士、隊長、マヌエル・ダス・オンサス。ラミーロ・バストスもたぶんいらつしやる」

「ラミーロ大佐が？夜にはぜつたい外出しない人なのに」

「来るって言つてた。あの悪党がもうすぐやつてくるわけだ。どうなることか。晩餐会は喧嘩で終わるかもしれない……」

ニョーロガローが手をこすりあわせる。

「こりゃおもしろくなるぞ……」不安なナシブを残して、ニョーロガローは収税課に戻って行った。バールの主人はみんなと友だちだ。こんな政治抗争からは距離を取っていなければならない。

晩餐会のために雇ったウェイターがやってきて、テーブルをくっつけ、ホールの設営を始めた。ほぼ時を同じくして脇に本の束を抱えた地方裁判所の判事がやってきた。テラス席のジョアン・フルジェンシオとジョズエーの隣に腰掛ける。二人は窓辺のグロリアを眺めていた。判事は恥ずべき行為だと断罪したが、ジョアン・フルジェンシオは笑いながら反対意見を述べる。

「先生、グロリアは社会に必要な女ですよ。行政監督局はルイ・バルボーザ文学会や五月十三日のエウテルペー祭やミゼリコールドディア修道院と同じくらいグロリアがみんなにとって有用なものだと考えるべきなんです。社会において重要な役割を果たしていますから。あの人が窓辺に見えるだけ、通りをときどき歩くだけで、町の暮らしの最も重大な側面のひとつ、つまり町の性生活のレベルがぐつと上がるんです。若者に美的感覚を教え、不細工な妻を持った夫の夢に品位を与えてくれる。不幸なことにそんな夫は町の大多数ですが、ともすると耐え難い犠牲に墮する夫婦のつとめに品位を与えてくれるわけです」

判事はあえて相手に譲歩した。

「君、見事な弁護だ。弁護した男も立派なら、された女も立派。ただ、これはここだけの話だが、たったひとりの男にあれほど大量のお肉は馬鹿げていると思わんか？しかも男が痩せて小さいとくりゃ……せめてひねもす窓辺に佇むのを止めてくれればいいんだが。あれじゃあまるで……」

「なにをお考えですか？他の男はだれひとりあの娘と寝てないとしても？そんなこたありませんよ。先生、そりゃ間違いです」

「無理だよ、ジョアン君。だれがそんな大それたことを」

「大多数の男性ですよ、判事先生。奥方と寝るときに脳裏に思い浮かべるのがグローリアなんです。つまり、グローリアと寝ているんですよ」

「なるほどなあ、ジョアン君。あんだが逆説を弄していることに気づくべきだった…」

「いずれにせよ、あのご婦人には強く惹かれてしまいます」とジョズエーが言う。「目を見ていると心までわしづかみにされそうで…」

『日刊イリエウス』を振り回しながらやって来る者がいる。

「みさなんもうご覧になりましたか？」

ジョアン・フルジェンシオとジョズエーはもう新聞を読んでいた。判事は新聞をわしづかみにすると、眼鏡をかけた。他のテーブルでも新聞が話題になっている。

「どうお考えですか？」

「まもなく政治が火を噴くぞ…」

「今日の晩餐会はおもしろくなりそうですね」

ジョズエーはまだグローリアの話をしている。

「驚きますよ、だれひとりあの娘にアタックしないんだから。私にとつては謎です」

ジョズエー先生は、学校ができたときエノクの引きでこの土地にやってきた新参者だった。すぐに土地に馴染み、モデロ文具店やパール・ヴェズーヴィオに足繁く出入りし、キャバレーに姿を見せ、お祭りについて議論し、娼婦の家で夕食を食べたが、イリエウスの昔話をあまり知らなかった。他の人たちが『日刊イリエウス』の記事について議論しているあいだ、ジョアン・フルジェンシオがジョズエーにコリオラーノ大佐とトニコ・バストスの間に起こった一件について話して聞かせた。ちょうどジョズエーが町にやってきて、コリオラーノ大佐がグローリアを家に囲ったころの出来事である。

警告についての余談

あれは、コリオラーノ大佐がグローリアを町に連れてきて——と、イリエウスの出来事と歴史の倉庫たるジョアン・フルジェンシオが語り始めた——数ある持ち家のうちでも一等良い家、家族がバィアに移る前に暮らしていた家だな、あそこにグローリアを住まわせてまもなくのころのことだった。老嬢たちが眉を顰めて大騒ぎしてたつけ。そのころだよ、公証人のアントニーヨ・バストスが、焼き餅焼きの奥さんとかわいい娘さんが二人いるラミーロ・バストスの愛息だよな、日曜になるとチョッキなんか着込んで、ご当地のドンファンでございって感じの、あのトニコが混血女にじっと流し目を送ってたんだ。

ジュカ・ヴィアナとシキーニヤの二の舞じゃないよ。あつ、ジョズエーさん、この古い話聞いたことある？だれか話してくれた？あの喜劇とも悲劇ともつかない出来事の詳細。喜劇というより悲劇かな。イリエウスの人たちの気質ときたら陰々滅々たるものがあるからね。トニコとグローリアの場合、浜辺を散歩したり、港の棧橋で手を取り合ったりしてなことはなかったし、夜陰に乗じてグローリアの家の扉を押すこともなかった。午後になるとトニコがナシブのパールで買ったキャンディーをお土産にグローリアの家にちよくちよく寄って、調子はどうか、なにか必要なものはあるか、と尋ねては帰って行くだけだね。熱い眼差しと甘い言葉を交わしてさ。さすがのトニコ先生も一線だけは越えてなかったんだ。コリオラーノ大佐とバストス家は以前からずっと友情で結ばれていた。ラミーロ・バストスはコリオラーノ大佐の息子の代父だし、政治のうえでは良きパートナーだし、お互いにしよっちゅう会ってたんだ。トニコにはこれがうまい言い訳になった。自分の妻、巨体で超焼き餅焼きのあのドナ・オルガのことだけど、この妻に、自分

は大佐と友情と政治的利害関係で結ばれているから、昼食後、あの怪しげな家に訪問をしないわけにはゆかないという説明ができたわけさ。怪しまれる筋合いなんかないってね。そこでドナ・オルガは巨大な胸を上下させ、鼻息も荒く脅しをかけてきた。

「トニコ。もし大佐に頼まれて行かないきやなんないんなら、行きなさいよ。あたしに恥かかせないように。でも気を付けなよ！もしあたしの耳になにか入ってきたら、そのときゃ…」

「なあオルガ、もしお前がそんなに疑ってるんなら、おれは行かない方がいいかもしれないな。ただ、コリオラーノ大佐と約束しちまったし…」

隊長も言うように蜜の舌だな。町中の女が、若きも、独身も、所帯持ちも、娼婦も、例外なくトニコを追いかけてるっていうのに、かわいそうにドナ・オルガにとつては、こんなに純な男はいないって話だ。これっぽちの疑惑で、トニコが誘惑に引っかからないよう必死で尻に敷こうつてんだから。もし事実を知ったら：

こうして忍耐とキャンディーの力でトニコは、そのころすでに文具店やボールで囁かれていた言葉を借りれば、「寝るためのベッドを準備し始めていた」ところが、事が成就するまえに起こるべきことが起こるべくして起こった。コリオラーノ大佐が訪問のことやキャンディーや恋いこがれた眼差しの噂を聞きつけたんだ。週の真ん中にイリエウスにやってきて、トニコの家の門を通ってずかずか中に入ってきた。トニコの自宅は登記所も兼ねているから、その時間は人で一杯だった。

アントニーニョ・バストスは大げさな身振りでトニコを迎え入れ、背中をポンポンと叩き、いつもと変わらず心のこもった良い奴であることを見せようとした。コリオラーノ大佐はトニコのそんな態度を受け流して、勧められるままに椅子に座り、泥で汚れた長靴を鞭で落しながら、声を荒げることもなくこう言ったんだ。

「トニコさん、あんた、わしの秘蔵っ子の家のまわりをうろうろ

しているそうじゃないか。わしはずいぶんあんたとの友情を大切にしてきたよ。ラミーロ君の家で小さいころのあんたを目にしたもんだ。そこでひとつ忠告をしておこう思ってた。年離れた友人からの忠告だ。あそこにはもう姿を見せんでくれ。わしのポーカー友だちで今は亡きヴィアナの息子、あのジュカ・ヴィアナのときも、わしはずいぶん鄭重に扱ってやった。ジュカも小さいときから見とつたからなあ。あんた、あれとの一件忘れとらんだろ？ 嘆かわしい出来事だった。かわいそうなことをしたが、他人の女に手を出したのはあっちの方だからな…」

登記所には気まずい沈黙が流れる。トニコがどもった。

「で、でも、大佐…」

コリオラーノは声色ひとつ変えることなく続ける。相変わらず鞭を振りながらね。

「あんたは美男だし洗練されとる。たくさん女がいて不足はなからう。わしは擦り切れの老骨だ。愚妻も、かわいそうだがもうすっかりヤキが回っている。わしに残されているのはグローリアだけだ。あの娘が好きだし、わしだけのものにしておきたい。よそ様のために女に金を払うという取引はわしの趣味に合わんでな、したためしがない」

コリオラーノ大佐はトニコ・バストスに微笑みかける。

「あんたはわしの友人だ。そこで友人として警告しておく。あそこへ行くのはもうこれきりにしてくれないか」

公証人は真っ青になった。不気味な静けさが登記所を領している。その場の人たちは顔を見合わせている。公正証書を作成するために居合わせたマヌエル・ダス・オンサスは、「死臭に満ちた空気」を感じたと後に言っていたよ。そういう臭いにはよく鼻が利くんだね、抗争の時代にあれだけ屍の山を築いた男だから。さて、トニコはこう言い訳を切り出した。それは作り話だ。ほくの敵と、コリオラーノ大佐の敵がでっちあげたけちな嘘っぱち。グローリアの家

に行くのは、毎日のようにみんなから侮辱を受けている大佐のお妾さんに、なにか必要なことはないか聞きに行くためにすぎない。以前大佐の家族が住んでいた聖セバスティアン広場の家に女を囲ったと言つてコリオラーノ大佐を非難する輩、あの娘から顔を背け、娘が通りかかると唾を吐く輩が、今回の中傷をでっちあげたんだ。ほんととして、大佐にたいする友情と連帯を天下に示したいだけなのに。あの娘とはなにもないし、なにかしようという魂胆もない。とまあここのたまうわけさ。ほんとうに蜜の舌だよな、あのトニコつて男は。

「あんたがなにもしてないことはわしにもわかつてる。でなきや、こんなところでのんびり話なんかせんで。話は別のものになつてるだろう。だが、もしあんたになにか魂胆があるなら、そのときや保証できんぞ。もつとも、魂胆だけじゃあ、だれも寝取られたことにはならんがな。あんたもみんなと同じようにしたらいいんだ。あの娘から顔をそむければ。わしとしてはむしろそうして欲しい。さあ、これで警告は終わった。もうこの話はなしだ」

と言つと、コリオラーノ大佐は何事もなかったかのようにすぐに商談に入った。それが終わると今度は奥に行つてドナ・オルガに挨拶し、子供たちの頬を撫でた。それ以後、トニコ・バストスはグロリアの家の前を歩かなくなり、グロリアは孤独な憂愁に耽ることがいつそう多くなった。町の人たちはこの事件を評して「寝る前に崩壊したベッド」と言つてたよ。しかも「轟音を立てて崩壊した」ベッドだつてね。イリエウスの人たちときたら血も涙もないからな。コリオラーノ大佐の警告はトニコだけに向けられたものではなかった。多くの男がグロリアにたいしては気持ちだけに止めることになった。生暖かい夜にもなると、そのせき止められた気持ち胸騒ぎに満ちた夢に化ける。夢の糧は窓辺に置かれたグロリアの胸と、目から口へと降りてくる微笑みだ。「欲望に濡れた」微笑みだよ。ジョズエーさん、あんたが見事な言葉で表現してくれた

ように。さて、その結果得たのはだれか？年取った醜い妻たちではないか、とぼくは思う——と、話も終盤に入ったジョアン・フルジェンシオが言う——だつてそうだろう。さつき判事に言つたように、グロリアはイリエウスの性生活のレベルを底上げする公共物であり、社会的必需品なんだから。発展がまぎれもなく行き渡っているというのに、いまだに封建的な町だからなあ、このイリエウスは：

閑話休題、そして晩餐会の話

ナシブの好奇心と不安をよそに、バス会社の晩餐会はなにごともなく平和裡に終了した。食前酒を楽しんでいた最後の客が退散する七時少しまえになると、もうロシア人ジャコブがやつてきて、手を揉み、白い歯を見せて満面の笑みを浮かべながら、ナシブの回りをうろつきはじめた。ジャコブも新聞の論説を読んでいて晩餐会がうまくゆくか気を揉んでいた。イリエウスのやつらときたら、すぐカッカするからな：共同経営者のモアシル・エストレーラはイタブーナから招待客を乗せてイリエウスに向かう長距離バスの到着を自動車修理工場で待っていた。乗客は行政長官と判事を含む十人。そこへ、乗客たちを不和と不信と分裂に陥れるあの不穏な論説が現れたという次第である。

「これからますます物議をかますことになるよ」

例によつてバックギャモンのためにいつもより早くやつてきた隊長は、今回の論説は事の発端にすぎない、これから論説だけでないくいろいろと出てくるはずだ、イリエウスは大騒ぎになるだろう、とナシブに打ち明けた。指にインクの染みをつけ、虚栄心で目をぎらつかせた博士もボールに立ち寄つたが、今えらく忙しいんだ、とだけ言つとそそくさと立ち去つた。トニコ・バストスはボールに戻つて来なかつた。噂によるとラミー口大佐に急いで来いと言われ

たらしい。

初めてバスでイリエウスに招待されたのはイタブーナからの客だった。道路はまだ半ばぬかるんでいたが、一時間半のバス旅行は素晴らしかったと客は口々に称賛した。客たちは、イリエウスの通り、家々、教会、バール・ヴェズーヴィオとそのドリントクのストック、シネリテアトロ・イリエウスをしきりに頷きながら眺めていたが、心中、イタブーナの方がずっと良い考えていた。教会だつてわが町に勝るものはないし、映画館もわれわれの方が上だ。イタブーナの丘に建つ新しい家々に肩を並べられるようなものはここに見あたらない。バールの酒類はわが町の方が豊富だし、キャバレーも客の入りが違う、と。このころになると、カカオ地帯のトップツには対抗意識が芽生え始めていた。イタブーナの住民は、ほんの数年前にはタボカス村と呼ばれ、まだイリエウスの一部にすぎなかった自分たちの土地が、日進月歩の発展を遂げ、今や驚異的な成長を遂げている、と胸を張って語る。客たちは隊長カピタンと議論し、港口の問題を話し合った。

デビューを飾るサンドラのマジックショーを観るために映画館に向かう家族連れがかりに目をやると、バールは大盛況で、町の名士たちがずらりと並んでいる。丁字型に並べた大テーブルでは、ジャコブとモアシールが招待客をもてなしていた。クローヴィス・コスタと連れ立ってやってきたムンデイーニョ・ファルカンが姿を見せると、一同に好奇心のざわめきが起こった。輸出業者はイタブーナの客と抱擁を交わす。なかに顧客がいたのである。マヌエル・ダス・オンサスと連れ立ってやってきたアマンシオ・レアル大佐は、ジェズイーノが判事の正式許可をもらって農場に帰り、農場で裁判の進展を見守ることになる旨を知らせた。リベイーニョ大佐は映画館の出入り口から目を離すことができなかった。アナベラがいつか姿を現すだろうと踏んでいたからである。話題は広がり、葬儀の話から前日の犯罪に及び、商談談義に続いて、雨が終

りましたが、収穫はどうなるでしょうなあ、などといった言葉が交わされ、サンドラ王子とアナベラの話まで出たが、港口と『日刊イリエウス』の論説の話題だけは注意深く避けられていた。だれもが、自分だけは確執の戦端を開くまい、その責任を取るまいとしているようだった。

八時ごろだった。そろそろ食事というころあいに、バールの戸口で来客を告げる声があった。

「ラミーロ大佐がトニコを連れておみえです」

アマンシオ・レアルが二人を迎えに出る。ナシブは動揺した。店内に緊張が走る。笑い声が空々しく聞こえた。ナシブは上着の下に隠したレボルバーに触れる。ムンデイーニョ・ファルカンはジョアン・フルジェンシオと話していた。隊長カピタンがふたりに近づいてゆく。広場の反対側には、マルヴィーナの家の門にジョズエー先生の姿が見えた。ラミーロ・バスタス大佐はステッキで体を支えながら疲れた足取りでバールに入ると、ひとりひとりに挨拶しながら進んでゆく。クローヴィス・コスタの前で足を止めると握手をした。

「クローヴィス、新聞はどうだい？好調か？」

「うまく行ってます、大佐」

ムンデイーニョ・ファルカン、ジョアン・フルジェンシオ、隊長カピタンの三人を前にしてしばらく立ち止まると、ムンデイーニョ・ファルカンには旅の様子を聞き、ジョアン・フルジェンシオにはこのごろちつとも顔を見せないじゃないかとこぼし、隊長カピタンには冗談を飛ばす。ナシブは老人の態度に舌を巻いた。腹のなかは怒りで煮えくりかえっているに違いない。なのにそれをおくびにも出さないとはい。自らの権力に戦いを仕掛け、現在の地位から引き降り降ろそうと画策する敵を、大佐はまるで頑是ない子供のように無害安全な輩と見ているのである。みんなは大佐を上座に連れて行き、二人の行政長官の間に座らせた。ムンデイーニョはすぐに二人の判事の間に戻る。ドス・レイス姉妹の作った料理がテーブルに載りはじめた。

はじめはみななどことなく緊張していた。飲んだり食べたり話したり笑ったりはしていたが、何か起こるのでは、という不安がテーブルの上に漂っていた。ラミーロ・バストス大佐は料理に手を付けず、酒の味だけを見ている。大佐の小さな目は招待客の間を次から次へ泳いでゆき、クロウヴィス・コスタ、隊長、ムンデイーニョに注がれると曇った。大佐はふと思った。博士が来ていないが、なぜだろう。あの人がいないとは残念だ。徐々に雰囲気は打ち解け、明るくなっていった。小話が飛び交い、アナベラの踊りが活写され、ドス・レイス姉妹の料理が絶賛された。

そしてついにスピーチの時間がやってきた。ロシア人ジャコブとモアシールは、晩餐会の主催者である会社を代表してスピーチしていただくよう弁護士のエゼキエル・プランド博士に依頼していた。弁護士は立ち上がった。だいぶ飲んでいたので口がねばねばしていたが、飲むほどに舌は回る。アマンシオ・レアルがマウリーシオ・カイレス博士に何か小声でささやいた。おそらくよく注意して聞くよう促したのだろう。なるほど、最後の選挙以後ラミーロ大佐に対する政治的忠誠が揺れているなら、エゼキエルは港口の問題を話題にするはずである。もし、そうならただちに反論するのがマウリーシオの役どころだった。ところが、エゼキエル博士はこの日感興を得るところが多かったせいか、カカオ地帯の姉妹都市であるイリエウスとイタブーナの友情を中心に話を進めた。この姉妹都市は今や新しいバス会社によっても結ばれることとなったが、それは進取の気性に富んだ男たちによって「実現されたとしてもない事業」であると持ち上げると、その男たちのひとりが「ブラジルの片隅を発展へと駆り立てるべくシベリアの氷原からやってきた」ジャコブであり——キエフのユダヤ人居住地区で生まれたジャコブはこの言葉に涙した——、いまひとりが「自らの努力で身を立てた、誠実な働き者の典型」モアシールである——あちこちから「よっ」と声がかかるが、そのあいだモアシールは慎ましく頭を下

げていた——と続け、ここから文明、発展という言葉を乱発して、「たちまち文化の最高峰に到達するに違いない」この地区の将来にかんするご託宣を並べたのである。

イリエウスの行政長官は、うんざりするような長いスピーチで、イタブーナからこんなに素晴らしい代表団をお招きできて云々と前置きするとイタブーナの住民を持ち上げた。一方、イタブーナの行政長官アリストーテレス・ピレスは簡潔に返答し、物思わしげにその場の雰囲気を見守る。次にマウリーシオ博士が立ち、その弁舌を解き放った。デザートに『聖書』の言葉を引用し、最後に「われらが土地に多大なる貢献をなした高潔のイリエウス人にして、目覚ましき有徳の人士。勤勉なる行政官にして模範的な一家の父。リーダーであるとともにまた友人でもある、このラミーロ・バストス大佐」のために乾杯を、と締めくくる。ムンデイーニョも大佐のために杯を上げ、みんなが杯を飲み干した。マウリーシオ博士が着席するが早い、今度は隊長がシャンペングラスを手に立ち上がる。カカオ地帯の発展にさらなる一步を記すこの祝賀会を利用して、自分も乾杯の発声をしようというのである。南部の大都市からやってきて、その富とまれに見るエネルギーを、政治家としての炯眼と郷土愛を当地に注ぎ込む男。すでにイリエウスとイタブーナに多大なる貢献をし、その名がひそかにこのバス会社にも結びついている男。この男ライムンド・メンデス・ファルカンと近年イリエウスの住民が試みたすべての事業のために乾杯、と隊長が発声をした。今度は大佐が輸出業者のために杯を上げる番だ。後日談によれば、隊長のスピーチのあいだ、アマンシオ・レアルはリボルバーの銃床にずっと手を置いていたそうである。

こうして何事も起こらず晩餐会は終わった。ただ、この日からムンデイーニョが土地の首領に昂然と対立し、闘いを開始したことはだれもが認めるところとなった。とはいえ、もはや土地をめぐる抗争の時代にあつたような旧式の戦いではなかった。連発銃や待ち伏

せは今やすでに過去のものとなり、登記所に火を放ったり、文書を偽造したところで立ちゆかなくなっていた。ジョアン・フルジェンシオが判事に言う。

「発砲の代わりに弁舌……こちらの方がよろしいですな」

判事は疑義を差し挟む。

「でも最後にはやっぱり鉄砲玉で終わるよ。見ててごらん」

ラミーロ・バストス大佐はまもなくトニコと帰った。あとの人たちはボールのテーブルについてたまま飲み続けていた。奥の別室ではポーカーの輪ができ、キャバレーに流れる客もぼちぼち出てきた。こうして騒然とした店内で、ナシブはちびくろが持ってきたリゾレータの付け文を受け取った。今晚ぜひ会いたいわ、バタ克蘭で待ってます、と書かれ、署名には「あなたのニヤンニヤン、リゾレータ」とある。アラブ人は満足そうに笑みを浮かべた。レジの横にはガブリエラに贈る小箱がある。キャラコのワンピースとサンダールが入っていた。

映画の上映が終わるとボールはふたたび混み始めた。ナシブははてさてこ舞いの忙しさだった。今度は例の論説が議論の中心になっている。まだ前日の事件を話題にする客もいるし、家族連れはマジックショーを絶賛していたが、ほとんどのテーブルで話題は『日刊イリエウス』の論説だった。店は遅くまで混雑し、ナシブがレジを閉めてキャバレーに向かった時はすでに夜中の十二時を回っていた。テーブルではアナベラがリベイリーニョやエゼキエルにアルバムの感想を求めている。ロマンチックなニョーガールは、「踊り子よ、きみは芸術の化身だ」と書き、ぐでんぐでんに酔ったエゼキエルは、震える文字でつけ加えた。「おれは芸術のジゴロになりたい」サンドラ王子はまがい物の象牙でできた長いパイプをふかしている。リベイリーニョは親しげにサンドラの背を叩きながら、自分の農場がいかに大きいか語っていた。

リゾレータはナシブを待っていた。ナシブが来るとホールの隅に

連れて行く。辛いことがあったの、と話し始めた。明け方まで気分が悪かったわ。昔やっかいなことがあったんだけど、それがまたぶり返してね。おかげでここ数日は地獄よ。仕方なくお医者さん呼んだんだけど、お金なんて一銭もないし、もうお手上げ。頼れる人はいないし、知ってるひとだっただってほとんどいないでしょう。で、あなたにすがろうと思って。あの晩、あんなに優しくしてくれたから……アラブ人はぶつくさ言いながら札を一枚リゾレータに渡した。リゾレータがナシブの髪をやさしく撫でる。

「すぐに良くなるわ、一三日で。そしたらまた呼ぶからね……」

リゾレータは急いで立ち去った。本当に病気なんだろうか。それとも、どこかの学生や店員風情とワイン付きの夜食を楽しむために金を巻き上げようって魂胆でおれに一芝居打ったのか。ナシブはイライラしてきた。今日のはあの娘と寝よう。葬式で滅入り、晩餐会と政治的陰謀で疲れ切った不安な今日一日を、あの娘の腕のなかで忘れよう。そう考えていたのに。身も心も擦り切れそうな一日が、こんな期待外れに終わるなんて。ナシブはガブリエラに渡す小箱をしっかりと抱えた。ライトが消え、羽根飾りをつけた踊り子が現れる。リベイリーニョ大佐がボーイを呼びつけ、シャンパンを注文していた。

ガブリエラの夜

部屋に入ると、ナシブは靴を勢いよく脱ぎ捨てた。その日はほとんど一日中立ちっぱなしで、テーブルの間を行ったり来たりだった。靴と靴下を脱いで足の指を動かし、裸足で歩いてから古いスリッパに足を入れる。ああ、なんて気持ちが良いんだ。感情と映像が頭のなかで交錯する。今ごろはアナベラがショーを終え、シャンパンを飲むリベイリーニョ大佐のテーブルに就いているだろう。今晚トニコ・バストスは姿を見せなかったな。で、王子は？ あいつは

いったい何者なんだ。エドゥワルド・シルヴァという名前で、名刺には「アーティスト」とある。シニカルな男だ。それだけは間違いない。あの大農場主に言い寄って、妻をその腕に押し込もうというんだから。妻の体で商売しているわけだ。ナシブは肩をそびやかした。ひよつとすると哀れな男なかもしれないし、あるいはアナペラなんかあいつにとつて大した意味はないのかもしれない。たまたま仕事で連んでるだけで。そうやってあいつは口に糊して、飢えを凌いでいるんだらう。見たところ、いままでもずいぶんひもじい思いをしたようだから。ほんとうに薄汚い稼業だ。でも、きれいな稼業なんてあるんだらうか？それに、おれたちに奴を非難できるのか？もしかすると、あの男の品格はオズムンドの友人たちより上かもしれないぞ。あのバールの仲間や文学仲間、発展クラブのダンス仲間や女性談義を交わす友人たちよりも。みな立派な市民のくせして、友人の亡骸を墓場まで持つてゆくことすらできなかったじゃないか：まっとうなのは隊長だけだ。ただ、かわいそうに、隊長の元手は連邦政府徴税官の稼ぎだけ、カカオ畑なんざ持つていない。それなのに自分の意見をきちんと持つて、人に真っ向から立ち向かって。オズムンドの親しい友人というわけでもないのに、葬儀に参列して棺の取っ手まで握ったじゃないか。それに晩餐会のスピーチはどうだ。あの人はみんなの面前で、しかもラミーロ・バストス大佐の目の前で、ムンデイーニヨの名前を堂々と口にしたんぞ。

晩餐会を思い出してナシブはぞつとした。いつ発砲沙汰があつてもおかしくなかった。そうなりやおれも静かにあの世行きだった。もつとも、まだ事は始まったばかりだ、と当の隊長が言つてたが。ムンデイーニヨは金を持つているし、リオに顔が利く。連邦政府には友だちもいる。オノラート博士が言うような「どこぞの馬の骨」なんかじゃない。あの腰のひんまがった老いばれ医師め、敵対勢力の領袖のくせして、ラミーロにずいぶん恩義があるらしいじゃないか。息子たちの職を世話してもらつたという噂だ。ムンデイーニヨ

は多くの人を巻き込もうとしている。票田の大農場主は割れるだらう。大変なことになるぞ。もし予告通り港口のために技師と浚渫船を呼ぶことに成功すれば：そのときはムンデイーニヨがイリエウスを奪取することになるだらう。そうなればバストス一族は陶片追放だ。しかも老大佐はじき引退。アルフレードが議会にぶらさがっているのも老大佐の息子だからにすぎない。小児科の医師としては名医だらう。でもそれ以上のものじゃない。そしてトニコ：あいつときたら生まれつきの政治音痴。命令を出したり取り消したり、ものを作ったり壊したりするなんてできっこないからな。女がらみ以外は。今日はキャバレーに來なかつたが、きつと例の論説について議論を戦わせたくなかつたんだらう。あいつは論争嫌いだから。ナシブは頭を振つた。ナシブは、隊長もトニコも、アマンシオ・レアールも博士も、どちらの陣営とも友人だつた。どちらとも一緒に飲み、遊び、語らい、娯家に行く。そもそもナシブの懐に入ってお金の出所はこの友人たちなのだ。それなのに、友人たちが今や分裂し、二つの陣営に分かれていて。全員の意見が一致しているのは、姦通を冒した妻は殺してかまわない、というただその一点だった。この点にかんしては隊長もシニヤジーニヤの弁護をしない。自宅に遺体を置いて葬儀をあげた従姉の夫でさえ同じだつた。それにしても、メルク・タヴァレス大佐の娘、ジョズエーがぞつこん惚れ込んでるあの娘はいつたいなにをしに來たのか？美しい顔立ちで言葉少なく、目は不安に戦っている。まるで秘密を、いや神秘を宿しているようだ。娘が他の女学生たちとバールにチョコレートを買いに來たことがあつた。見ていたジョアン・フルジェンシオはこう言つたものだ。

「あの娘は他の娘たちと違うな。なにか特別なものがある」
違っているのはなんだ？あんなに学のあるジョアン・フルジェンシオの言葉だ、なにかあるんだらうが、「特別なもの」とはいつたいななんなんだらう？いずれにせよ、メルク・タヴァレス大佐の娘

が花束を抱えて通夜に姿を見せたことは確かだ。一方、娘の父親はジェズイーノを訪ね「やつに連帯を表明してきた」はずだ。「奴隷市場」で本人から聞いたのだからこれも間違いない。独身女学生の分際で、未来の夫を待つ身の娘が、いつたいなにをしにシニャジーニャの棺までやってきたんだらうか?どこもかしこも分裂だらけだ。父があつちで、娘がこつち。この世はまさに複雑怪奇。知りたいい人には分かるのか。いずれにせよ、おれの手に負える代物じゃない。たんなるバールのオーナー風情が、なぜあれこれ考えなくちゃならんだ?おれがなすべきは、金を貯めてカカオ畑用の土地を買うこと。神のご加護があれば叶うだらう。たぶんそのときだろうな。マルヴィーナの顔を正面から見、その謎を解くことができるのは。あるいはせめてグローリアくらいの女に家を買ってやれれば。

喉が渴いていたのでナシブは水瓶の水を飲み、台所に入った。小箱に気づいた。おじの店で買った服とスリッパが入っている。どうしようかしばらく迷う。明日本人に手渡すのがベストだろう。あるいは奥の小部屋のドア付近に置いておくか。そうすれば家政婦が起きたとき気づくだろう。クリスマスプレゼントみたいに：ナシブは微笑むと包みを手に取った。台所で水をぐいっと三回呷る。この日は晚餐のあいだ酒を注いで回りながら自分も飲み過ぎていた。

夜空高く昇った月が庭のパパイアとグワヴァを照らしている。女中部屋のドアは開いていた。きつと暑いのだろう。フィロメーナのときはいつも部屋に鍵がかかっていた。泥棒を恐れていたのである。聖人画は老婆の宝だった。月の光は部屋の中まで差し込んでいく。ナシブは歩を進めた。小箱をベッドの足元にでも置こうか、と考える。朝、目が覚めたらきつと驚くだろう。そして、いずれ近い夜に：

宵闇のなかで探るように目を見張る。一条の月明かりがベットに這い上がり、足を一カ所照らし出していた。その映像が目に焼き付

き、ナシブの体はすでに昂っている。今晩はリゾレータの腕のなかで眠るつもりだった。すつかりそうできるものと思込んでキャバレーに向かい、道々、リゾレータの練達した愛技を思い出しては楽しんでいった。大都市の娼婦だけが知る技だ。その欲望が苛立ちに代わってしまった。ところが今、目の前にはガブリエラの小麦色の体が横たわっている。片足がベッドからはみ出していた。ナシブの目はつぎはぎだらけの上掛けに隠れた肢体まで見ようと、いや見通そうとする。破れたスリッパからはお腹と胸のぞいていた。片方の乳房は半ば飛び出している。ナシブは少しでもよく見ようと目を見開いた。そして気の遠くなるようなあの丁字の香り。

ガブリエラは寝返りを打った。アラブ人は部屋のなかに入る。手はだらりと垂らしたまま。眠る体に触れる気にはなれない。事を急いでどうする?もし娘が叫んだら?もしスキヤンダルにでもなったら?もし出て行かれたら?また料理女なしになるんだぞ。こんな素晴らしい料理女は金輪際見つからないだろう。ベッドの脇に小箱を置いて行こう。それがいちばん良い。明日はもう少し長く家に居ようか。そして少しづつこの娘の信頼を得る。そうすれば最後にはきつと身を任せてくれるだろう。

小箱を置く手が震える。ガブリエラがびくつとして目を開けた。なにか言おうとしたが、ナシブが立って自分を見つめていることに気づく。とっさに上掛けを手でたぐり寄せようとしたが、緊張しすぎたせいか、それともからかっているのか、上掛けをベッドから落としてしまった。上体を起こすと座り直して恥ずかしそうに微笑んだ。はだけた乳房を隠そうともしない。今では月明かりに照ってはつきりと見える。

「プ、プレゼントを持って来たよ」とナシブはどもりながら言う。「きみのベッドに置こうと思つてさ。今、帰ってきたところなんだ」

娘は微笑んでいた。びくびくしているのか、それとも励まそうと

しているのか？どちらにも見える。まるで子供のようだった。太股や乳房が見えていてもなにも不都合を感じていないようだし、ある種のことにについてはなにも知らないといった様子。純粹無垢そのものだった。ナシブの手から小箱を受け取る。「ありがとう、旦那さん。神様のご加護がありますように」

紐をほどく。ナシブは娘の姿をゆっくり眺めた。娘は微笑みながら服を体に当て、手で撫でている。

「すてき…」

今度は安物のスリッパを眺める。ナシブは息切れがしてきた。

「旦那さん、とっても良い方ね…」

欲望がナシブの胸を昇って喉を締め付けていた。視界がぼんやりしてきて、丁字の香りに頭がくらくらする。娘はもつとよく見ようと服を手に持った。無邪気な裸体が再び露わになる。

「すてき…あたし起きてたんです。明日のお食事どうしたらいいかうかがうまで旦那さんを待つてようと思つて。でも遅くなつたんで、寝ちゃった…」

「仕事がたくさんあつてね」ナシブはやつとの思いで言葉を絞り出した。

「かわいそうに…お疲れじゃないですか？」服を二つ折りにするとスリッパを床に置く。

「それを渡して。フックにかけとくよ」

ナシブの手がガブリエラの手に触れた。ガブリエラが笑う。

「冷たい手…」

ナシブはもう我慢ができなかった。片手で娘の腕を掴まえると、もう一方の手で、月明かりに大きく浮かぶ乳房をまさぐる。娘は男を抱き寄せた。

「すてきな旦那さん…」

丁字の香りが部屋いっぱい広がった。ガブリエラの体から立ち上る熱気がナシブを包み、その肌を熱する。ベッドの月明かりは次

第に消えていった。接吻と接吻のあいまに、ガブリエラの喘ぐような囁き声が聞こえた。「すてきな旦那さん…」

(続く)